

潜在的ケアラーのケア志向に関する質的研究

—大学生への着目を通じて—

古谷 友亮

本研究は、「近い将来にケアを担う可能性のある若者(=以下、潜在的ケアラー)」が、自身のライフコースの中で「家族のケア」についてどのように捉えているのかを明らかにする事を目的とした、探索的な研究である。本研究での「潜在的」が意味する所は、時間軸で捉え、「まだケアしていない」という意味で用いる。また、本研究は2020年代に入り政府による重要課題の1つとして実態調査や法整備が進んでいる「ヤングケアラー」に関する研究と位置づける。

今回、潜在的ケアラーとして筆者が想定するのは、「高齢の親、ひとり親、既往症のある家族、障害のあるきょうだい、引きこもり・不登校のきょうだい」等がいる学生である。以上の境遇にある学生は、将来の老親介護よりも早い段階で家族のケアに直面する可能性が高い。また、現在ケアの負荷が大きくなっていくとも、ケアの可能性が身近にあるという状態が、将来不安や孤独感等を与えている事が先行研究(濱島,2023)等で指摘されている。

政府による実態調査では、小学校6年生の6.5%、中学2年生の5.7%、全日制高校2年生の4.1%、大学3年生の6.2%に世話を必要とする家族が「いる」事がわかった。研究者による質的な研究や、こういった実態調査の結果を受け、政府は2024年、子ども若者育成支援推進法においてヤングケアラーを始めて明記した。それに伴い具体的な支援政策も展開され始めている。

一方で、現行のヤングケアラー支援は、政府により「年齢の切れ目のない支援」が打ち出されながらも、18歳未満のヤングケアラーへの支援が中心となっている事が有限責任監査法人トーマツの調査により明らかとなっている。そのため、今後は18歳以上の若者ケアラーへの支援の拡充が必要である。本調査の分析のまとめでは、若者ケアラーへの支援の1つとして、「大学」にできる事についても言及する。

次に調査についてである。本研究では上述で示した潜在的ケアラーに該当する学生に対して、インタビュー調査を行い、彼ら彼女らがどのようにケアを志向しているのかを明らかにする。

調査対象者は、主に指導教員の担当講義内でアナウンスを行い募集した。1時間程度の半構造化インタビューを通して「ケアの可能性、ケアとキャリアとの間での葛藤、家族をケアする事のイメージ」等の聞き取りを行った。その後の分析については、質的調査において広く用いられている TA (Thematic Analysis) 法を用いた。

分析の結果、想定される潜在的ケアラーとして、3パターン考えられる事がわかった。想定するケアの対象が「祖父母ケアのサポートと将来の親(以下:祖父母)」パターン、「将来の親(以下:親)」のパターン、そして「きょうだい」のパターンである。以上の3パターンだけでなく、これらが複合的に想定される場合もある事は確認しておく必要がある。3パターン全てに共通する点として、3点あげられる。1つ目は、「今この瞬間の学生や若者(18歳~20歳代)」という時期に、自らが主となって家族のケアを担う想定はない」という点である。2つ目は、「ケアという言葉は、大変なもので介護と結びつくイメージがある」点である。3つ目は、「子に迷惑をかけたくない親の存在」である。3点目に関しては、「家の事は気にしなくていいよ。自分に介護は必要になったら施設に入るから」等の親の言葉があり、これにより現時点では学生自身のケアとキャリアをめぐる葛藤を大きく抑制している事がわかった。また、この姿勢の親は特に母親に目立つ結果であった。

3パターン化した中で、親グループのケア志向は中西(2009)の先行研究で明らかにされた若者の介護意識との共通点が多い結果となった。主な特徴として、祖父母グループでは、地元就職を志している傾向があり、近いうちに地元に戻るために祖父母のケアに関わる可能性があるとの事であった。きょうだいグループでは、以前から既にケアのサポートには携わっている語りが多くあったが、自身が「ケア」をしている自覚はなく、ケアは他人事に感じるという点が共通していた。他にも、ケア志向を形作る要因は様々なものがあり、各家庭の関係・状況または、土地柄によっても異なる点がわかった。

最後に、潜在的ケアラーを含めた若者ケアラーへの支援について、大学が担い得る役割について、本調査では2つの可能性が明らかになった。1つ目は、大学という教育機関ができる支援である。授業形態の柔軟化や出席配慮、相談窓口の設置、気楽に話せる場作り等の意見があげられた。もう1つは、授業を通して得られる学び・価値観の変化であり、調査では数名が、調査対象者の募集を行った授業の中で、「ケア」という言葉のイメージが変化したという語りがあった。語りには、「ケアを学ぶ事は自らの人生、家族の中でケアについて考える契機となった」という旨のものがあつた。この点は、前田(2020)が指摘する職業キャリアに焦点が当たっている現行のキャリア支援・キャリア教育に、「ケア教育」を組み込む事の新たな可能性を示唆している。前田(2020)の言う「生き方の模索」「どう善く生きるか」といった点についても、学生自身が思索するきっかけとなるだろう。